懐徳　第八六号　平成三十年一月三十一日　抜刷

西村天囚関係資料調査報告

―種子島西村家訪問記―

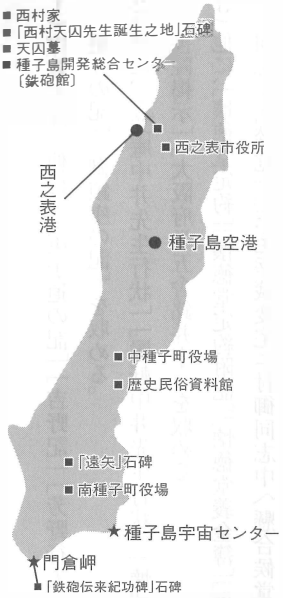
湯浅邦弘
竹田健二
佐伯薫

西村天囚関係資料調査報告
―種子島西村家訪問記―

湯浅邦弘（大阪大学教授、懐徳堂記念会理事）
竹田健二（島根大学教授、大阪大学招聘教授）
佐伯薫（懐徳堂記念会事務局員）

一、調査に至る経緯

平成二十九年（二〇一七）八月二十五日～二十八日の日程で、種子島の西村家（鹿児島県西之表市）を訪問し、西村天囚関係資料の調査を実施した。参加者は、湯浅邦弘（大阪大学教授、懐徳堂記念会理事）、竹田健二（島根大学教授、大阪大学招聘教授）、佐伯薫（懐徳堂記念会事務局員）の三名である。



話は一年前にさかのぼる。平成二十八年は、大正五年（一九一六）に再建された懐徳堂（重建懐徳堂）の開学百周年にあたり、懐徳堂記念会と大阪大学では、懐徳堂展や記念講演会などを開催することとなった。同年十月二十二日～十二月二十二日の二ヶ月間、大阪大学総合学術博物館（待兼山修学館）を会場に、懐徳堂展「大阪の誇り―懐徳堂の美と学問―」が開催され、これに合わせて同年十月、『増補改訂版懐徳堂事典』（湯浅邦弘編著、大阪大学出版会）と図録『懐徳堂の至宝』（大阪大学総合学術博物館叢書、湯浅邦弘著、大阪大学出版会）が刊行された。

この余韻が残る平成二十九年六月、西村貞則様・久美様ご

夫妻、ならびにその令嬢の矢田睦美様の来訪を受けた。西村氏は、天囚から数えて四代目にあたる後裔で、現在、種子島在住。大阪大学には初めての訪問であった。

当日、湯浅と懐徳堂記念会の佐伯が対応し、大阪大学文学研究科玄関に設置してある重建懐徳堂復元模型をご覧いただいた後、阪大図書館の懐徳堂文庫にご案内した。懐徳堂文庫全五万点の中には、西村天囚旧蔵書が「碩園記念文庫」として収められている（碩園は天囚の別号）。

懐徳堂記念会の設立と重建懐徳堂の建設・運営に尽力した西村天囚は、大正十三年（一九二四）に亡くなるが、その翌年、旧蔵書が一括して懐徳堂文庫に引き継がれたのである。

その碩園記念文庫の中から、天囚の自筆書き入れのある資料を中心にご覧いただいた。西村氏は、天囚の旧蔵書が貴重書として丁重に保管されていることに大いに感激され、また、先祖直筆の資料をご覧になって感無量の様子であった。そして、種子島にはまだ天囚関係資料が多数あり、今後の保存等をどのようにしていいか検討しているとのことであった。

西村氏の阪大訪問は、重建懐徳堂開学百年後のことであり、天囚の導いてくれた運命的な出会いのように感じられた。西村氏からは種子島訪問の要請があり、またこちらも資料調査の必要性を強く感じて、このたびの訪問となった。

二、西村家資料の概要

まず、調査対象となった資料の概要を紹介したい。西村家所蔵天囚関係資料の内、主なものは次の通りである。

① 「讀騒廬」扁額
② 草稿・講義録・著書等
③ 書画類

01　大阪松ヶ枝町の天囚書斎、左上に「讀騒廬」扁額

④印章・文具類
⑤アルバム・写真類
⑥書簡・文書類

①は、かつて大阪市北区松ヶ枝町在住時（明治三十五年～大正十年）の天囚の書斎に掲げられていた扁額で、天囚を紹介する際よく使われる写真（大正十年（一九二一）秋撮影01）でも確認できる。「讀騒廬」とは、『楚辞』を読む書斎という意味。「騒」は、『楚辞』に収められた屈原の長編叙事詩「離騒」を指す。『楚辞』善本の収集と研究に努めた天囚にふさわしい書である。

ただ、この実物が西村家に今も保管されていることは今回初めて確認された。また、伝わっている写真では不鮮明で分からないが、この書の末尾（左端）に「乙酉秋日曲園居士　兪樾書」（02）とあった。この書を揮毫したのが、清の考証学者として著名な兪樾（号は曲園）であることが分かる。この点については、すでに、後醍院良正『西村天囚伝（下巻）』（朝日新聞社社史編集室、一九六七年）や、それに依拠した町田三郎「天囚西村時彦覚書」（『哲学年報』第四十二輯、一九八三年、のち『明治の漢学者』（研文出版、一九九八年）所収）にも紹介があるが、「乙酉」（きのととり）の年やその扁額の入手の経緯については触れられていない。

02　兪樾の署名

「乙酉」は、六十年に一度巡ってくる干支。兪樾の生卒年（一八二一～一九〇六）を考慮すると、一八八五年（清の光緒十一年、明治十八年、兪樾六十四歳）となる。兪樾には、『楚辞人名考』という著作がある。『楚辞』研究にも力を入れていたことから、この書を揮毫したのではなかろうか。一方天囚は、慶応元年（一八六五）の生まれなので、この年二十歳である。天囚は、明治十六年（一八八三）、東京大学古典講習科に官費生として入学。優秀な学徒ではあったが、まだ無名の学生の天囚に、大学者の兪樾が直接揮毫して贈るということはありえない。

そうすると、この書は、どのような経緯で天囚の書斎に掲げられることになったのであろうか。西村氏もその来歴については分からないとのことで、現時点では未詳としか言いようがない。ただ、考えられる可能性としては、次のようなものがある。

第一は、後に天囚が清に留学、取材・資料収集に行った際、

何らかの方法で入手したものとの可能性である。天囚は、明治三十年（一八九七）から三十一年の二ヶ月、明治三十二年（一八九九）冬から明治三十五年（一九〇二）にかけての約二年余り、明治四十年（一九〇七）夏の一ヶ月、の計三回渡清している。天囚の資料収集癖は有名であった。これらのいずれかの機会に入手した可能性は高い。

第二は、天囚自身が中国で求めたのではなく、中国に渡航する知人に依頼して入手したとの可能性である。天囚の高弟武内義雄（たけうちよしお）の「先生の追憶」（懐徳堂堂友会『碩園先生追悼録』、一九二五年）によれば、「松雲堂主人が北京に行った如きは欧文電報まで打って楚辞を集めることを頼まれた」といい、また武内自身が中国に留学した際にも、天囚のために『楚辞』を捜したという。ここに言う「松雲堂」とは、大阪の古書肆鹿田松雲堂（第三代鹿田静七、号は餘霞）であろう。

またもう一つの可能性として、長崎の漢学者楠本碩水（くすもとせきすい）（一八三二～一九一六）との関係がある。大阪朝日新聞に連載された天囚の紀行「九州巡礼」によれば、明治四十年（一九〇七）、天囚は、長崎県針尾島の郷里にいた碩水を訪れている。碩水の書斎は「江下村舎」といい、その扁額が兪樾の書であったという。とすれば、兪樾と楠本碩水とに何らかの関わりがあり、その碩水を経由して、「讀騒廬」の書が天囚に渡ったという可能性も考えられる。

いずれにしても、古い写真でしか見ることのできなかった「讀騒廬」の扁額が実在していたことは大変な驚きであった。

但し、資料の経年劣化は深刻で、周囲の紙には断裂が多く確認された（03）。緊急修復を要する文化財である。また今後、種子島または大阪大学で常設展示するのならば、その精巧なレプリカを制作するのが望ましいと感じられた。

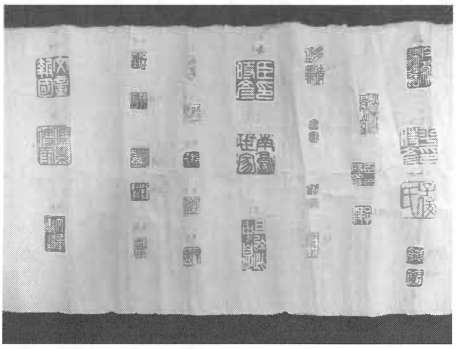
03　扁額の経年劣化

次に、②③は計九つの衣装ケースの中に収められていた。今回は時間の関係で、この内の一つのみの調査にとどまったが、その中には、懐徳堂あるいは京都帝国大学での講義のために準備したと思われる講義録や様々な草稿・記録類が含まれていた。この中の「故西村博士記念会会務報告書」については、本稿第三章参照（竹田健二担当）。

④の内、印章は、二つの箱に無造作に収められていた。一部には、紙のキャップが作成され、破損を防いでいるが、緊急の調査と資料箱作成の必要性を感じさせる資料群であった。

幸い、巻紙に鈐印（04）されていて、その数は全六十三顆。中には側款により、その来歴が分かるものもある。

篆刻は、「天囚居士」「碩園」「時彦」「子俊」などの号や名を刻んだもののほか、「懐古」印や「碩園収蔵楚辞百種」印などが注目される。



04　西村天囚印の印譜

「楚辞百種」とは、晩年、天囚が収集に努めた『楚辞』の善本コレクションであり、懐徳堂記念会を経由して、現在、大阪大学懐徳堂文庫所蔵となっている。中国でも珍しい貴重書を含むため、昭和十一年（一九三六）には、中国の清華大学教授劉文典（一八八九～一九五八）一行が重建懐徳堂を訪問し、この「楚辞百種」を中心とする碩園記念文庫の調査研究を行っている。

また、この巻紙（印譜）を最後まで開いていくと、末尾に「東京都外下大崎二三四　西村時彦」の印が押されていた。とすれば、この印譜が作成されたのは、大正十年（一九二一）、天囚が宮内省御用掛に任ぜられ、同年十月三日、大阪から東京五反田下大崎の島津邸役宅に引っ越した後であることが判明する。すなわち天囚晩年の印譜である。

但し、後述の種子島開発総合センターに出品されている十一顆の印章との関係や、この印譜と現存する印章との関係については、今後の調査を必要とする。

江戸時代の懐徳堂の印章については、印譜『懐徳堂印存』（懐徳堂記念会）があり、印章の実物約二百顆も、懐徳堂文庫に収蔵されている。この点は、湯浅邦弘『墨の道　印の宇宙―懐徳堂の美と学問―』（大阪大学出版会、二〇〇八年）に詳しい。また、第四代学主を務めた中井竹山の印九十二顆と、その弟の履軒の印六十八顆については、全点のデジタル画像撮影が行われ、現在、「WEB懐徳堂（http://kaitokudo.jp/）」で公開している。将来、ここに西村天囚印を加えることができると期待される。

⑤のアルバム・写真類は、今回の調査の中でもとりわけ注目された資料である。懐徳堂記念会や大阪大学には、重建懐徳堂期の写真類がほとんど残されていない。ところが、西村家には、明治大正時代の貴重な写真がアルバム九冊に貼られていた。この点の詳細については、本稿第四章参照（佐伯薫担当）。

⑥の書簡・文書類は、今回の訪問では充分調査できなかったが、西村家より、そのマイクロフィルムを寄託していただけることとなった。

実は、平成十六年（二〇〇四）、宮内庁により、皇室に関係のあった人物の資料調査が実施され、宮内省御用掛を務めた天囚の書簡・文書類もその対象となった。宮内庁の調査結果は『西村家所蔵西村天囚関係資料目録』にまとめられているが、それによれば、天囚宛書簡五一七件、天囚発信書簡一〇七件、時輔（天囚の弟）宛書簡一九八件、家族宛書簡七一件、その他書類二四七件、などとなっている。

天囚宛の書簡の中には、懐徳堂記念会との関係からも注目されるものが多い。一例をあげると次の通りである（発信者の五十音順）。

・今井貫一（大阪府立図書館初代館長、懐徳堂記念会初代理事の一人）書簡二通
・上野理一（朝日新聞創始者、懐徳堂記念会発起人の一人）書簡十一通
・小倉正恒（懐徳堂記念会第二代理事長、住友本社総理事・大蔵大臣）書簡三通
・狩野直喜（京都帝国大学教授、東方文化研究所（現・京都大学人文科学研究所）初代所長、重建懐徳堂にも出講、天囚の京都帝国大学出講を周旋）書簡二十三通
・武内義雄（重建懐徳堂講師、東北帝国大学教授、天囚の高弟、天囚の主著『日本宋学史』に解題を記す）書簡四通
・内藤湖南（東洋史学者、京都帝国大学教授、大阪朝日新聞編集者、懐徳堂記念会顧問）書簡六通
・永田仁助（懐徳堂記念会初代理事長、浪速銀行頭取）書簡十七通
・松山直蔵（重建懐徳堂初代教授）書簡一通
・吉田鋭雄（重建懐徳堂最後の教授）書簡一通

また、必ずしも懐徳堂に直接関わるものではないが、学者、文人、ジャーナリストからの書簡も多数確認される。例えば、次のような発信者である。

・荒木寅三郎（天囚出講時の京都帝国大学総長）
・池辺三山（高橋健三の後の大阪朝日新聞主筆）
・市村瓚次郎（東洋史学者、国学院大学学長、東京帝国大学古典講習科の天囚の同期生）
・岡野養之助（大阪朝日新聞社編集局主幹）
・木崎愛吉（朝日新聞編集者、天囚らと「浪華文学会」を結成）

・後醍院良正（東京朝日新聞社、大阪朝日新聞社学芸部長）
・塩谷時敏（漢学者、第一中学校兼東京帝国大学講師）
・重野紹一郎（天囚が東京で師事した重野安繹の長男、仏文学者）
・高橋健三（大阪朝日新聞客員、論説担当）
・瀧川亀太郎（東京帝国大学古典講習科卒、天囚の学友、第二高等学校教授、『史記会注考証』の著者）
・長尾雨山（高松出身の漢学者・書家・画家）
・三上参次（歴史学者、東京帝国大学教授、「明治天皇御紀」編纂主裁）
・本山修一（大阪毎日新聞社長）

これ以外にも、宮内省や政治関係者との交流をうかがわせる書簡があり、全体として、天囚の広範な知のネットワークをうかがい知ることのできる資料群である。

これまで、天囚の伝記に関するものとしては、懐徳堂堂友会『碩園先生追悼録』（一九二五年）や、前掲の後醍院良正『西村天囚伝』、町田三郎「天囚西村時彦覚書」などが知られている。西村家に残されている書簡類は、そうした伝記類とどのような関係にあるのか。新発見の事実も期待できる資料である。これらはマイクロフィルムに収録されているので、今後、西村家の了解を得られたものについては、デジタルアーカイブ化を推進しつつ調査研究を実施し、重建懐徳堂期の歴史の解明に結びつけていきたい。

（湯浅邦弘）

三、「故西村博士記念会会務報告書」

現在大阪大学附属図書館懐徳堂文庫に収蔵されている碩園記念文庫は西村天囚の旧蔵書であり、大正十三年（一九二四）七月二十九日に天囚が東京で亡くなった後、財団法人懐徳堂記念会（以下、懐徳堂記念会）に寄贈されたものであることはよく知られている。しかし、天囚の旧蔵書が懐徳堂記念会の所蔵となるに至った詳しい経緯については、従来よく分かっていなかった。

すなわち、後醍院良正『西村天囚伝』下巻（朝日新聞社社史編集室、一九六七年）には、天囚の没後、天囚の母・浅子と妻・幸子とは、東京から大阪に引っ越すこととなり、「家財処理の際、天囚の蔵書全部は、最もゆかりの深かった懐徳堂に保管されることが適切との意見に従い、懐徳堂側では、今後の遺族の生活を考慮し、適当な価格（注―筆者の聞くところでは四万円）で買い受けることになった。」とある。これによれば、天囚の遺書は懐徳堂記念会に寄贈されたのではなく、懐徳堂記念会が購入したものということになるが、この記述

を裏付ける資料はこれまで確認できなかった。

また、懐徳堂記念会が大正十五年（一九二六）十月に出版した『懐徳堂要覧』の「新懐徳堂沿革」には、大正十四年（一九二五）「九月七日、故西村博士記念會より、同博士舊藏書全部を碩園記念文庫の名を附して保存すべく、本會に寄贈せらる」と記述されている。これによれば、天囚の蔵書は懐徳堂記念会が購入したものではなく、また遺族から懐徳堂記念会に直接寄贈されたものでもなく、「故西村博士記念会」から懐徳堂記念会に寄贈されたものということになる。しかし、「故西村博士記念会」とは如何なる団体だったのかについては、これまで詳しいことは分かっていなかった。

今回の西村家所蔵資料の調査により、「故西村博士記念会会務報告書」と題された小冊子の存在が明らかとなった（01）。本資料は、懐徳堂文庫や大阪府立中之島図書館には収蔵されておらず、筆者はこの資料の存在をまったく知らなかった。判型は概ねA五判と同じサイズで、表紙・裏表紙を除き本文は全二十二頁、内容は①「故西村博士記念会会務報告」②「会務概要」③「収支決算」④「寄附者芳名並寄附金」の四つの部分に分かれている。

「故西村博士記念会会務報告書」（以下、「会務報告書」）は、「故西村博士記念会」が解散するにあたって発行したところの活動報告書と考えられるもので、これによって天囚の旧蔵書が懐徳堂記念会の所蔵となるに至った詳しい経緯が判明した。

すなわち、「会務報告書」の記述によれば、大正十三年（一九二四）十一月六日、天囚と親交のあった関係者が重建懐徳堂に集まり、天囚を記念し、かつその遺族の生活の安定を図ることを目的として「故西村博士記念会」を結成し、三万円を目標額として寄附金を募り、集まった寄附金によって天囚のすべての遺書を遺族から購入し、更にその購入した天囚の遺書を「碩園記念文庫」として懐徳堂記念会に寄贈する、との計画が立案された。この計画は、翌大正十四年（一九二五）一月十日に発起人一二七名の承諾するところとなり、実行委員が定められて実行に移された。実行委員は、以下の十六名である。

01　故西村博士記念会会務報告書

磯野惟秋　今井貫一　原田棟一郎　大久保利武
岡野養之助　小倉正恒　狩野直喜　高原　操
土屋元作　内藤虎次郎　永田仁助　植田政藏
上野精一　松山直藏　後醍院正六　愛甲兼達

同年二月二十三日、「故西村博士記念会発起人総代」である大久保利武・永田仁助（ともに実行委員）の名で「醵金依頼状」が発送された。そして、同年六月末までに合計四百四十五口、金額にして三万四千十一円にも及ぶ寄附金が集まった。「故西村博士記念会」は、そこから必要経費を除いた三万三千八百六十二円七十銭を、天囚の未亡人・幸子に遺書購入代金として支払い、そして購入した天囚の遺書を「碩園記念文庫」として懐徳堂記念会に寄贈したのである。

当時の三万三千八百六十二円七十銭が、現在のお金にしてどの程度の価値があったのかについては把握が難しい。企業物価指数から見るならば、現在のおよそ一千七百万円余りに相当することになる（日本銀行ホームページ「教えて！にちぎん」参照）。しかし、この数字はかなり低いように思われ、おそらくはもっと価値が高かったと推測される。

ここで注目されるのは、第一に、天囚の遺書は「故西村博士記念会」によって遺族から三万三千八百六十二円七十銭で購入され、その上で懐徳堂記念会に寄贈された、との新事実が明らかとなった点である。第二に、「碩園記念文庫」の名は、懐徳堂記念会が寄贈を受けた後にその名称を検討して命名した訳ではなく、「故西村博士記念会」が寄贈にあたってそのように命名することを望んでいたことが明らかとなった点である。

もっとも、「故西村博士記念会」なる団体と懐徳堂記念会とは、かなり密着した関係にあったと見てよい。このことは、遺書の寄贈を受けた懐徳堂記念会の理事長・永田仁助が、寄贈した側の「故西村博士記念会」の実行委員であり、しかも発起人総代二人のうちの一人であったことから明らかと考えられる。すなわち、「会務報告書」の②「会務概要」に収録されている「懐徳堂記念会へ遺書寄贈書」（大正十四年九月七日付）は、宛名が「懐徳堂記念会理事長永田仁助」となっているのだが、差出人として「故西村博士記念会発起人総代／永田仁助／大久保利武」と記されている。また、同じく②「会務概要」には、懐徳堂記念会理事長としての永田が、「故西村博士記念会発起人総代」（肩書きのみで記名なし）に宛てた「受領書」が収録されている。

懐徳堂記念会の初代理事長であった永田仁助が、「故西村博士記念会」の実行委員であり、「発起人総代」の一人でもあったということは、「故西村博士記念会」の行った事業が、懐徳堂記念会関係者によって構想されたものであることを示していると考えられる。あくまでも臆測だが、当時懐徳堂記念会

には天囚の遺書を遺族から一括して購入するだけの資金はなく、また財団法人懐徳堂記念会寄附行為（定款にあたるもの）との関係などから、懐徳堂記念会が非会員をも対象に広く募金活動を行うことには問題があると見なされたことから、「故西村博士記念会」なる任意団体を別に立ち上げて、この「故西村博士記念会」が寄附金を集めて遺書を遺族から購入し、購入した遺書を懐徳堂記念会へ寄贈することになったのではないか、と推測される。

ちなみに、④「寄附者芳名並寄附金」によれば、最も高額の寄附は、男爵藤田平太郎・藤田徳次郎・藤田彦三郎の三兄弟が連名で一口五千円、男爵住友吉左衛門（元・懐徳堂記念会会頭）も同額を一口寄附している。続いて大阪朝日新聞社が三千円、鴻池善右衛門が二千五百円、大阪朝日新聞社有志が一千五百円（大阪朝日新聞社有志については内訳〔金額と氏名〕も記載されている）、上野精一・富子正夫（上野理一の娘婿）・平瀬三雄（同）が連名で千二百円、大阪毎日新聞社・永田仁助・村山龍平・久原房之助がそれぞれ千円である。こうした千円以上の高額寄附十口（四百四十五口の約二・二パーセント）だけで、集まった寄附金全体の約六十五パーセントにあたる二万二千二百円に及ぶ。もっとも、寄附金の金額は以下五百円から一円までとかなり幅がある。寄附の総数が合計四百四十五口にものぼることからも明らかなように、少額の寄附者が多数存在した点は注目される。

「会務報告書」によって明らかとなった「故西村博士記念会」の活動は、懐徳堂顕彰運動の中心であった西村天囚が、大阪の人々から如何に深く敬愛されていたかということを、そして明治の末から始まった懐徳堂顕彰運動が定着し、大阪の各界関係者が重建懐徳堂の活動を如何に強く支えていたかということを、実によく表わしているといえよう。

（竹田健二）

四、西村家所蔵天囚関係写真類について

本章では、今回の資料調査で発見した写真類（アルバム九冊、台紙付き写真一枚、写真一枚）の全体像を紹介する。

重建懐徳堂及び懐徳堂記念会（現：一般財団法人懐徳堂記念会）と西村天囚（以下、天囚と略称）とは、密接な関係にある。しかし、管見の限りにおいて、一般財団法人懐徳堂記念会（以下、記念会と略称）は、天囚の写真を所蔵していない。『懐徳』や『懐徳堂記念会の九十年』など、記念会が刊行した書籍・雑誌等の中には、天囚の写真を掲載しているものが少なからずあるが、それらの元の写真が、どこに所蔵されているのか、不明な状態であった。また、今回発見した写真類には、天囚の写真以外にも、重建懐徳堂に関する写真も含まれてい

た。これらの写真も、天囚の写真と同様、記念会が刊行した書籍・雑誌等に掲載されていることが確認できたが、どこが所蔵している写真を用いたものであるのか、不明な状態であった。そのため、今回の調査によって写真類が発見されたことは、とても重要なことであると確信している。

今後の調査で、更に写真類が発見される可能性は高いが、今回のものを分類すると、大きく次のA・B二つに分けられる。

・A　天囚自身に関する写真類

・B　西村家関係（除天囚）の写真類

A「天囚自身に関する写真類」には、主に、大阪朝日新聞社勤務時の写真（世界一周旅行・日清戦争従軍時等）や、京都帝国大学で講師を務めていた頃の写真が含まれている。仕事関係のほか、家族・友人との写真や書斎の一場面を撮影したもの、天囚が狩猟に参加している様子などが収められている。また、天囚の松ヶ枝の旧自宅や、天囚のお墓の写真も含まれている。

B「西村家関係（除天囚）の写真類」は、西村家にゆかりのある人物写真が多く収められている。天囚の子どもや孫、友人たちと思われる写真もある。これらの人々は、現段階では、個人名の特定が困難である。しかし、今回の調査で西村家の家系図も発見できたため、今後、西村家のご教示も得ながら特定できる可能性が高い。

以上が、写真類の全体像である。前述のとおり、現在までに記念会が刊行した書籍・雑誌等にも、天囚や重建懐徳堂に関する写真が掲載されたことはある。今回の調査で発見した写真類の内、それに該当するものは、筆者が気づいた範囲において十一点ある。これらの写真は全て、Aに分類されるが、便宜上、「重建懐徳堂に関する写真」と「天囚に関する写真」とに分けて以下に列挙してみよう。

なお、通し番号の下に「　」で挙げているのが、該当書籍・雑誌等に記載されている写真のタイトルである。その下には、写真が掲載されている書籍・雑誌等の名称を記した。

重建懐徳堂に関する写真

1.「堂友會發會式當日撮影」
　　『懐徳』第一号

2.「孔子没後二四〇〇年を記念して挙行された式典」
　　『懐徳堂記念会の九十年』

天囚に関する写真

3.「碩園西村先生の肖像」『懐徳』第二号「碩園先生追悼録」

4.「碩園先生の家庭」『懐徳』第二号「碩園先生追悼録」

5.「碩園先生追悼祭典」『懐徳』第二号「碩園先生追悼録」

6.「碩園先生告別式」『懐徳』第二号「碩園先生追悼録」

『懐徳堂記念会百年誌』

7.「碩園先生壙志（岡田正之君撰）」『懐徳』第二号「碩園先生追悼録」

8.「碩園先生阿倍野墓地」『懐徳』第二号「碩園先生追悼録」

9.「松ヶ枝の舊邸」『懐徳』第二号「碩園先生追悼録」

10.「松ヶ枝の舊邸前の老松」『懐徳』第二号「碩園先生追悼録」

11.「書斎の西村天囚」『懐徳堂―浪華の学問所』『懐徳堂記念会の九十年』『懐徳堂の歴史を読む』『懐徳堂記念会百年誌』

1～11の内、特筆すべきは、11.「書斎の西村天囚」である。この写真は天囚を紹介するときに、もっとも良く使われている写真である。しかし、先述のとおり、この写真も所蔵先不明であった。その写真が、今回の調査で発見されたことは、記念会に属する者として、感極まる思いであった。なお、この写真には天囚の書斎名を記した「読騒廬」の額が写っているが、この扁額自体も今回の調査で発見された（第二章参照）。

以上を踏まえて、今回確認できた写真類の概要を以下に記す。

［凡例］

一、整理番号、形態、タイトル、寸法（縦×横：糎）、A・Bの種別、解説、の順に掲げる。

二、整理番号①～⑪は、本報告のために便宜上付したものである。

三、形態は、アルバム（冊子）、台紙に貼ってある写真、単独の写真、の三つに区別し、アルバムには便宜上、通し番号を付した。

四、タイトルはアルバムの表記に従う。アルバムの表表紙には、左上にタイトルを記した小さな紙が貼られている。九冊の内、四冊はこの紙が良好な状態で残っているが、残りの五冊は、この紙が剥落もしくは虫損があるため、明確に読み取ることができない。本報告では、タイトルを記した紙に記された情報を重視し、アルバムのタイトルとして採用している。判読が困難なものについては、□の記号で示す。なお、⑩⑪はアルバムではなく、タイトルの表示がないため、代わりに内容を端的に表示した。

五、A・Bの種別は、明確に分けがたいものもあるが、主にAとBのどちらに属するかを記した。

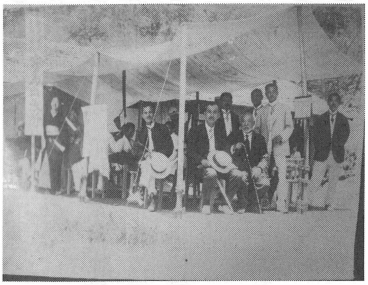
六、解説は、写真の説明文を尊重する。一部の写真の近くには、簡単な説明が書き込まれている。例えば、写真が撮影された年月日や人物名、状況等である。その他、筆者が重要だ

と感じたことについても、説明を加えている。

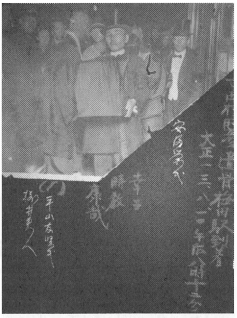
①アルバム1。「不明」。（27・5×37・0）。主にA。写真類の内、最も虫損が激しく下半分が欠けている。「霧島夏期大学講演場」と題された写真（左側の看板に「鹿児島県立図書館霧島出張所」とある）のほか、大阪朝日新聞社に勤めていた頃の写真（集合写真、世界一周旅行等）が確認できる（01・02）。このアルバムの中に11.「書斎の西村天囚」が含まれている。

②アルバム2。「不明」。（24・5×33・0）。前半は主にA、後半はB。天囚の死後、整理されたアルバムであると推測される。前半は天囚の葬儀と告別式の写真である。このアルバムの中に5.「碩園先生追悼祭典」、6.「碩園先生告別式」、7.「碩園先生壙志（岡田正之君撰）」、8.「碩園先生阿倍野墓地」、9.「松ヶ枝の舊邸」、10.「松ヶ枝の舊邸前の老松」が含まれている。このほかにも、「八月十日夜懐徳堂関係者

01「大阪朝日世界一周幹部」

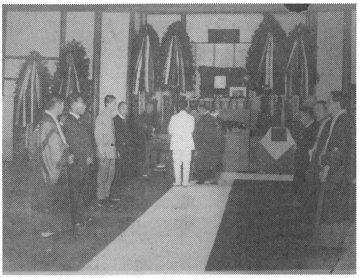


02「霧島夏期大学講演場」

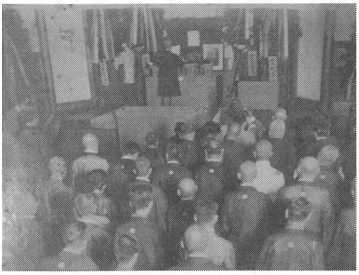


03「亡西村時彦遺骨梅田駅到着 大正十三、八、一〇午后八時十二分」

04「八月十日 懐徳堂関係者通夜」



05「八月十一日告別式参拝者」



06「八月十一日懐徳堂 理事長永田仁助氏弔辞朗読」

通夜」「八月十一日告別式参拝者」と書き込みされたものが数点ある（03～06）。

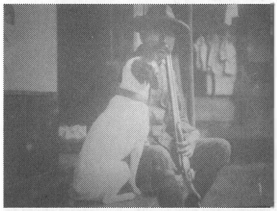
③アルバム3。「□□人」（27・5×37・5）。主にA。一部Bが混合。前半は、大礼服を着用した天囚の肖像写真が三点確認できる。これは、3.「碩園西村先生の肖像」の別アングルである（07）。続いて、大阪朝日新聞社勤務時の写真（世界一周旅行・日清戦争従軍時等）や、京都帝国大学で講師を務めていた頃の写真が含まれている（08～09）。アルバム1と重複している写真が複数ある。このほかにも、天囚が狩猟に出る際、自宅で撮影した写真もある（10）。このアルバムの中に1.「堂友會発發會式當日撮影」、4.「碩園先生の家庭」、が含まれている。重建懐徳堂に関する写真としては、「懐徳堂のお祭」と書き込みされたものが二枚ある。これは2.「孔子没後二四〇〇年を記念して挙行された式典」の別アングルである（11）。

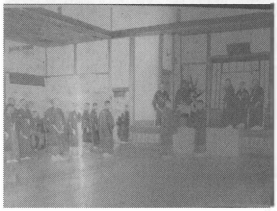
④アルバム4。「家族」（18・0×38・0）。主にB。一部Aが混合。説明書きが充実している。前述のとおり、西村家には家系図が残されており、アルバムの人物と照らし合わせれば、今後の研究がより充実したものとなるだろう。Aに関する写真も数点確認できる。例えば、「松ヶ枝町全景」と書き込みされたものがある（12）。この写真は、10.「松ヶ枝の舊邸前の老松」より以前に撮影されたものと推測される。天囚とこの松の木については、深い関係がある。後醍院良正『西村天囚伝（下巻）』（朝日新聞社社史編集室、一九六七年）によれば、「天囚の家の前には、通りを隔てて樹齢数百年を数えるといわれる老松があった。丁度向い側

07「大正十一年写 五十八歳」

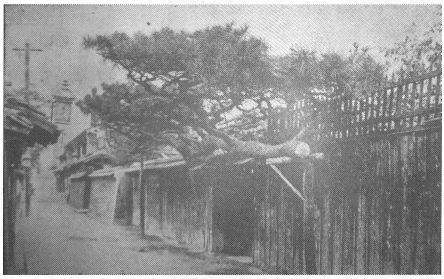
08「世界一周記念撮影 米国ワシントンにて」

09「京都帝國大學」


10「於自宅出猟之際」


11「懐徳堂のお祭」

の家の板塀の中間を突き破るようにして太い幹を道にのぞかせ、たけは一丈にも足らぬほどであったが、南北に蜒々として枝を張り、その長さは約十間にもおよび、臥竜の如き観を呈していた。この松ゆえに松ヶ枝町の名もできたわけである。しかし、なに分にも老松のため年毎に枝が枯れて短くなり、大正九年、遂に枯死するに至った。そのため同町の青年団たちが、この名松を後世に伝えるため、当時青年団長をしていた天囚に謀り、その碑文を依頼し、大正十年に「霊松碑」が立つに至った」とある。碑は、大正十年以降に建てられたので、「松ヶ枝町全景」の松の木は、それ以前の枯死する前の姿を写したものである可能性が高い。このほかにも、「時彦祭典」と書き込みされたものがある。これは5.「碩園先生追悼祭典」の別アングルである。また、「大阪阿倍野父墓地（幸子・松栄）」と書き込みされたものが確認できる。これは8.「碩園先生阿倍野墓地」の前で撮影された家族写真である。


12 「松ヶ枝町全景」

13

14 「豊山先生町葬」

⑤アルバム5。「□婦人」。（27・5×37・5）。B。「□婦人」というタイトルが付けられているが、男性を写した写真も多く含まれている。アルバム4同様、説明書きが充実している。

⑥アルバム6。「男子」。（33・5×24・5）。B。タイトルのとおり、男子の写真で構成される。人物名の書き込みが充実している。この中には、天囚の師である儒者・前田豊山の肖像写真や、彼の町葬風景の写真が確認できる（13～14）。

⑦アルバム7。「不明」。（18・0×28・0）。B。幼児の写真で構成される。人物名の書き込みが充実している。この中には、『西村天囚伝』の著者である、後醍院良正の幼少期の写真が数点確認できる。

⑧アルバム8。「婚禮」。(27・5×37・5)。B。タイトルのとおり、婚礼写真(新郎新婦の写真や、参列者一同の集合写真等)で構成される。

⑨アルバム9。「子供」。(16・0×23・0)。B。書き込みから、天囚の孫(「時紹」「時子」「時昌」「時雍」)の幼少期の写真が含まれた家族写真であることが分かる。経年劣化により写真が変色し、個人の特定が困難なものが多い。

⑩台紙付き写真。重建懐徳堂関係者の集合写真(15)。厚紙(32・5×39・3)に、写真一点(20・8×27・3)が貼られている。A。写真上部の虫損が激しく、元来の大きさは縦21㎝くらいかと推測される。厚紙裏面に、主な人物名を印字した紙が貼付されている。これにより、天囚のほか、林森太郎、松山直蔵、武内義雄、今井貫一、吉田鋭雄といった重建懐徳堂にかかわる著名な人物たちが確認できる。

15 「重建懐徳堂関係者の集合写真」

⑪写真。天囚の肖像写真(16)。(25・5×17・4)。A。3.「碩園西村先生の肖像」と同様のもの。「壬戌紀元節時彦年五十八」の書き込みがある。天囚は大正十三年(一九二四)に六十歳で亡くなっているため、この写真は亡くなる二年前に撮影されたものである。着用している大礼服は、現在、種子島開発総合センターに展示されている。

16 「天囚の肖像写真」

[参考文献]
・『懐徳』第一号(懐徳堂堂友会、一九三八年)
・『懐徳』第二号(懐徳堂堂友会、一九三九年)
・懐徳堂友の会・懐徳堂記念会編『懐徳堂―浪華の学問所』(大阪大学出版会、一九九四年)
・『懐徳堂記念会の九十年』(懐徳堂記念会、一九九九年)
・湯浅邦弘・竹田健二編『懐徳堂アーカイブ 懐徳堂の歴史を読む』(大阪大学出版会、二〇〇五年)
・懐徳堂記念会百年誌編集委員会編『懐徳堂記念会百年誌』(懐徳堂記念会、二〇一〇年)

(佐伯 薫)

五、種子島開発総合センター

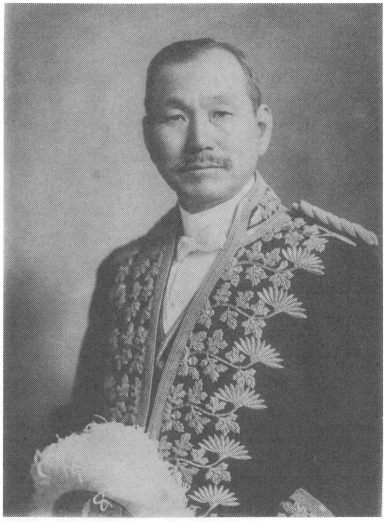
西村家での資料調査に先立ち、八月二十五日に、種子島開発総合センター（西之表市西之表）を訪問した。ここは西之表市教育委員会の管轄で、種子島に関わる歴史的資料を多数常設展示している。種子島が鉄砲伝来の地であることから、火縄銃を含む多数の鉄砲も展示しており、通称を「鉄砲館」という。

ここに、天囚とその師の前田豊山（まえだほうざん）（一八三一～一九一三）を顕彰するコーナーがあった（01）。天囚に関しては、当時着用していた紋付羽織、大礼服のほか、勲四等瑞宝章、印章十一顆、硯、朱肉つぼ、著書『屑屋の籠』『南島偉功伝』などが展示されていた。「出品者西村時昌氏」と説明パネルに附記されているので、これらの資料が天囚の孫にあたる時昌氏の時代に同センターに寄託されたものであることが分かる。

館内を説明していただいたのは、同センターの沖田純一郎参事と柳田さゆり係長であった。両氏によれば、種子島でも、天囚のことを知る人は少なくなってきており、顕彰活動が大きな課題になっているとのことであった。

01　種子島開発総合センターの前田豊山・西村天囚展示

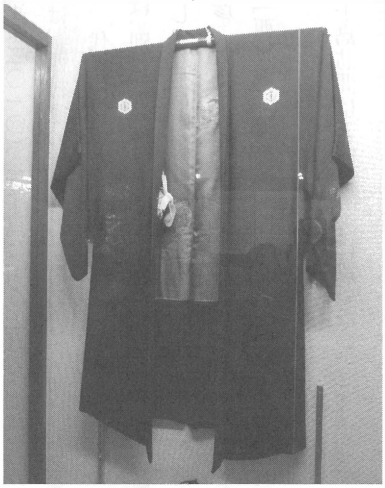
筆者にとって特に印象深かったのは、紋付羽織である。天囚と言えば、大礼服姿の写真（大正十一年撮影）（02）が有名であり、それを実見できたことには感激したが、紋付羽織（03）はそれ以上に感慨深かった。これは、天囚没後、その形見として平山武緝（ひらやまたけつぐ）氏が持っていたものを、後に平山氏が同センターに寄贈したとされる。武緝氏とは、天囚の母浅子の兄寛蔵の孫で、天囚の甥にあたる。天囚の書生を務めていた人でもある。展示の説明文によれば、この羽織は天囚が大正五年（一九一六）九月から同十年八月までの五年間、京都帝国



02　大礼服姿の西村天囚

大学文学部の講師として出講した際、必ず着用したものであるという。

天囚は、紋付羽織に袴という古来の正装で威儀を正し、講義に臨んだのである。近年、大学教員でも粗雑な服装で登壇する者が多くなってきているが、天囚の考えは違っていた。学問・教育に対する真摯な姿勢を物語るものであろう。「文質彬彬、然る後に君子なり」（外面の美と内面の質朴さが、ほどよく調和してこそ、君子なのである）（『論語』雍也篇）という孔子の言葉が思い起こされる。天囚の講義には、京都帝国大学の荒木寅三郎総長も学生と机を並べて聴き入ったという。西村家には、この荒木総長が天囚に宛てた書簡（書籍寄贈の礼状）も残されている。



03　天囚が着用していた紋付羽織

なお、羽織に染め抜かれた家紋は、「亀甲に向かい蝶」であった。西村家で拝見した家系図によると、西村氏の祖先は武門の平氏から出ている。平信基の孫の信真の六男信時が西村姓を賜い、この地の宰領となったとのことである。由緒ある家柄であり、天囚は、「平時彦」と署名することもあった。この紋付羽織を着て講義した天囚の矜持がうかがわれる。

六、天囚墓

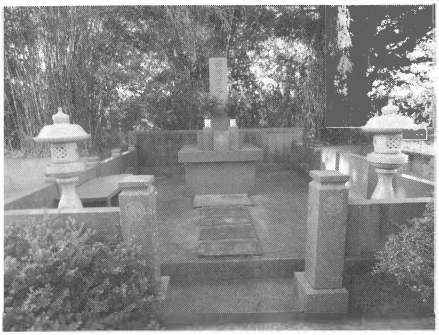
種子島開発総合センターの視察に続いて、西村家のお墓参りをさせていただいた。

平成二十八年（二〇一六）五月、関西大学で開催された東アジア文化交渉学会第八回国際シンポジウムにおいて、筆者は、懐徳堂研究のパネル（第二十八パネル「大阪の漢学と文化交渉1 ― 懐徳堂を中心に」）を構成して、司会並びに研究発表を行った。その際、参加者の中から、大阪阿倍野墓地（市立南斎場）にあったはずの西村天囚墓が見当たらないとの指摘があった。誰も答えることができず、その後も謎となったままであった。

ところが、西村氏との出会いにより、この謎が解けた。大阪を愛した天囚の墓は阿倍野に作られ、内藤湖南による墓碑銘が刻まれた。ただ、大阪に縁故も少なくなったことから、

平成二十二年（二〇一〇）、種子島に引き上げることにしたという。現在は、西村家のすぐそばの墓所に「西村家之墓」（01）として、代々の先祖とともに合祀されている。中央の墓標の右側には、別に「銘碑」として、上部に「亀甲に向かい蝶」の家紋、そして、「宮内省御用掛従四位勲四等　文学博士　天囚西村時彦　大正十三年七月三十日　行年六十歳」とあり、また、母の「西村浅子」、妻の「西村幸子」の名が添えられている。

今回の種子島訪問は天囚の導きに違いない。そう思ってこの地に赴いた我々は、この墓前で深く頭を下げた。



01　種子島の西村家の墓

七、史跡

このほか、種子島には、天囚関係の史跡・施設があるので、我々が実見したものを関連して紹介しておきたい。まず、第五章ですでに触れた種子島開発総合センターには、建物の前庭に「ふるさと歴史散歩」という看板が立っており、西村天囚が次のように紹介されている。

西村天囚はこの地に生まれ、前田豊山の教えを受けて育ちました。

上京し、東京帝国大学に入学、大阪朝日新聞記者となり、世界を股にかけ活躍しました。漢文学・宋学の第一人者として、京都帝国大学講師を務め、その後宮内省御用掛となりました。

大正十二年（一九二三）関東大震災の直後に出された「国民精神作興詔書」の起草、種子島家の歴史を記した「南島偉功伝」の執筆など、数多くの功績を残しています。

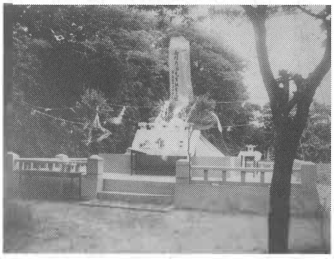
朝日新聞のコラム、「天声人語」は、天囚が名付けたものです。

また、その横に、「西村天囚先生誕生之地」の石碑（01）、および「西村天囚先生略年譜」の石碑が見られる。実は、こ

の「西村天囚先生誕生之地」の石碑は、昭和十六年（一九四一）、天囚生家の屋敷跡に、熊毛郡教育会によって建てられたものである。創設当時は台座も備え、高さは計五メートル五十センチにも及ぶものであった（02）。

その後、昭和五十八年（一九八三）、この地に種子島開発総合センターが建設されたことにより、台座を取り払って移設されたという。種子島開発総合センターのご教示によれば、移設されたのは、その前年の昭和五十七年で、前庭の奥の目立たない場所にあったが、今から七年ほど前に、センター入り口近くの前庭に移転したとのことである。また、台座は、安定しなかったことから、やむなくその一部が今も地中に埋められているという。

01 「西村天囚先生誕生之地」石碑



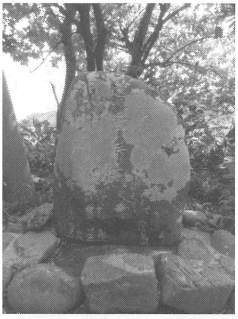
02 昭和16年除幕式の「西村天囚先生誕生之地」石碑（台座付き）

ともかく、天囚は、種子島を代表する偉人なのである。

一方、島の中部・南部にも、天囚関係の史跡がある。種子島は現在、北部の西之表市、中部の中種子町、南部の南種子町に行政区分されている。八月二十七日、西村氏の案内で、我々は西之表を離れ、中種子・南種子に向かった。

まず中種子町にある歴史民俗資料館を訪れた。ここには、文字通り、中種子地区を中心とする古来の民俗関係資料が多数あったが、その中に、前田豊山の書簡一通と西村天囚の詩一篇がガラスケース内に展示されていた。天囚の詩は、帰省途中の車中、弁当包みに書いたものであるという。ここでも天囚は顕彰されている。

次に、南種子に向かった。現在の本村公民館の敷地内に、古い石碑が建っている（03）。碑文は「遠矢落四町三段（反）



03 遠矢碑

04 弓を射る天囚（中央）、種子島守時（左）、西村時三（右）

三間一尺五寸」とあった。これは、宝永三年（一七〇六）正月、西村時員の強弓を顕彰して建立されたものである。室町時代に、的はじめの射芸が種子島に伝来して以降、弓道が盛んになった。この碑文によれば、約五百二十メートル余りを射たことになる。時員は延宝七年（一六七九）生まれ。天囚の先祖に当たる。なお、天囚自身も弓道を得意とし、西村家に伝わる写真では、種子島守時、西村時三と並んで弓を射る天囚の姿が確認される（04）。種子島守時は鹿児島藩家老種子島久尚の次男、種子島氏第二十七代島主、明治三十三年男爵。西村時三は、天囚養子の時教の実父である。

ここからさらに南下し、種子島南端の門倉岬に向かった。

天文十二年（一五四三）八月二十五日、明国船がこの地（西之村）に漂着した。当時の西之村の宰領は西村織部丞時貫、すなわ天囚の十三代前の祖先である。上陸した明国人と三人のポルトガル人を前に、織部丞は、手にしていた杖で砂浜に漢文を書いた。明国人との間で筆談が成立し、漂着の顛末が明らかになった。そこで、船を赤尾木（現在の西之表）に回航させることとした。乗員百数十名は、織部丞から知らせを受けた種子島時堯（種子島氏第十四代島主）と面会。西之表の慈恩寺の宿坊に滞在することとなった。その際、時堯は、ポルトガル人の携えていた火縄銃二挺を購入。これがいわゆる鉄砲伝来である。

そこで、門倉岬には、この歴史的事実を顕彰する「鉄砲伝来紀功碑」が立てられている（05）。二メートル四十センチを超える大きな石碑の裏面には、端正な漢文が刻まれていた。実は、大正十一年（一九二二）、西村天囚の撰文である。書き出しは次の通り（原文は句読点なし）。

05 門倉岬の「鉄砲伝来紀功碑」

火器古稱鐵砲者今所謂小銃也。其傳来我國在三百八十餘年前、實我種子島氏始。

現代語訳すると、「火器、古くは鉄砲と称するのは、今で言うところの小銃である。それが我が国に伝来したのは三百八十年余り前、実は我が種子島氏のときに始まる」という意味になろう。全体は、八三六字からなる漢文である。日本史上の大事件「鉄砲伝来」が、天囚とつながるのである。

八、西之表市役所

訪問最終日の八月二十八日、西村氏の仲介で、西之表市役

所を訪問し、市長との面会が実現した。ご多忙の中、面会して下さったのは、八板俊輔市長、大平和男教育委員会教育長、社会教育課の松下成悟課長、および第五章で紹介した種子島開発総合センターの沖田参事である。会談は三十分ほどであったが、きわめて充実した内容となった。

八板市長からは、来年度が西之表市の市制施行六十年にあたることから、天囚の資料展と講演会を種子島で開催したいとの意向をお伝えいただき、可能であれば、将来、種子島開発総合センターとは別に、天囚記念館を建設し、それが懐徳堂分館になればとおっしゃっていただいた。

また、大平教育長からは、天囚のような文化人を生み出した母体としての種子島の顕彰に努めたいとの発言があった。確かに、種子島と言えば、鉄砲伝来と宇宙センターが有名であるものの、世界遺産に指定された隣の屋久島に比べてやや影が薄い。しかし、屋久島は急峻な山岳地形で文化の母体とはなりにくかったのに対し、種子島は、平地となだらかな丘陵に恵まれた文化の地であった。前田豊山や西村天囚はもっと顕彰されても良いだろう。

最後に、具体的な取り組みとして、西之表市または種子島開発総合センターのホームページと懐徳堂記念会のホームページに相互リンクを張ること、種子島と大阪で協力して、天囚関係資料の調査研究、資料修復に取り組むことなどが話し合われた。

こうして全日程は無事終了し、充実した調査を終えることができた。台風銀座と呼ばれる種子島には珍しく、四日間とも快晴に恵まれた。紺碧の海と抜けるような夏空を目にして、これも天囚の配慮であろうと感じられた。

人生は出会いである。百年の歴史を凝縮したような出会いであった。西村家の方々をはじめ、資料調査にご高配を賜った関係各位に厚く御礼申し上げたい。

（湯浅邦弘）

【附記】

・本稿執筆に際して、西村家の各位および種子島開発総合センターより懇切なご教示をいただき、また、写真の掲載についてご許可をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

・本稿に先立って、湯浅邦弘「種子島に残る西村天囚の記憶」（『東方』第四四二号、二〇一七年十二月）を資料調査の速報として発表しました。内容の一部が重複することをお断りします。

・アルバムとは別に大型台紙に貼られていた一枚の写真（本稿第四章参照）について、竹田健二「西村家所蔵資料中の一枚の集合写真について」（『懐徳堂研究』第九号、二〇一八年）が別途詳細な考察を加えています。